

政治の現象学あるいはアジテーターの遍歴史——目次

第一章 集団の成立

第一節 他者の発見

- 一 私は私と行動を共にする他者を発見し彼と二元的な関係を結ぶ
- 二 私の二元的関係の鍵を彼だけが握るため関係はたえず挫折する

第二節 アジテーターと大衆

- 一 私は二元的関係を他者たちにまで拡張して私の仲間を発見する
- 二 他者たち大衆の相互の関係を媒介する私はアジテーターとなる

第三節 集団の成立

- 一 アジテーターの言葉は私の身柄から離れて私の集団を統合する
- 二 集団内をとり交う言葉は私たちの共同観念の成立を告げている

第四節 言葉

- 一 言葉の生産現場ではアジテーターの言葉がすなわち集団である
- 二 私の言葉を通じて形成された集団は言葉を通じて私を超越する

第五節 遍歴への出発

- 一 反乱のなから私は私自身をたずねて政治の遍歴へと出発する

第二章 反乱世界

第一節 熱い集団

- 一 私たちの肉的親しさのうちで最初の集団——共同体が経験される

第二節 共同観念の爆発

- 一 暴力を通じて私の共同観念は現実の集団から世界へと逸脱する
- 二 世界思念によつて私は私の集団にエネルギーと矛盾を充填する

第三節 反乱世界

- 一 神話世界の聖別——私は空間の制約を忘れ絶対的なここに生きる
- 二 ユートピア現前——私は時間の命令を忘れ絶対的ないまを生きる

第四節 反乱世界の統一性

- 一 私は反乱世界のシンボルを体現しカリスマとして神格化される
- 二 反乱世界のシンボルは共同規範として私をこの世界に統合する

第三章 政治的経験

第一節 敵の再発見

- 一 反乱世界に侵攻してくる敵との敵対を私は観念的に絶対化する
- 二 目前の敵と絶対化された敵とに私の敵のイメージは二極化する
- 三 私の敵を否定的な媒介として私は再び私たちの集団を発見する

第二節 政治的経験

- 一 私は敵対関係を集団に内面化し私の政治的経験史を始動させる
- 二 絶対的な敵に直面したいま私たちは集団へと絶対的に結束する
- 三 私たちの団結が集団を分裂させ反乱世界は諸集団へと分化する

第三節 政治家としてのアジテーター

- 一 私は政治的経験の主宰者となり集団内部をはじめて差異づける

第四節 政治的経験の諾契機

- 一 個々の敵相手では私の古い政治経験がなお私の集団を統制する
- 二 最初の敵に直面し集団の反省は内部分裂と私の追放をもたらす
- 三 戦闘にのぞんで敵の像は二極分解し私の政治的経験も四散する

第五節 大衆の政治同盟

- 一 私の集団は一つの名前をもち他の集団に伍して運動へ出発する
- 二 私は以前の大衆ではないがまだ階級的な名前を発見していない

第四章 政治的意識の飛躍

第一節 政治的意識の経験史

- 一 私は政治の経験史を私の集団的意識の経験史として追っていく
- 二 私はわが手を焼いてとびのくことによつて火の扱いかたを学ぶ

第二節 集団の動力学

- 一 私の集団の再形成と諸集団の動力学の展開が私の意識を変える
- 二 味方の分裂で身を裂くことをつうじて私は古い身柄を脱皮する

第三節 「意識変革」

- 一 私にはひとの心はわからない——しかしひとびとの心はわかる
- 二 私は私の自己変革の問題を倫理から政治のレベルへと奪還する

第四節 集団討論

- 一 集団の討論を通じて私は集団意志飛躍の内面的過程を経験する

第五章 政治集団の展開

二 私の発言は組織内部の異相を挑発し集団意志の分裂を発見する

第一節 政治結社から大衆政治同盟へ

一 反乱を準備する私の結社は一地方の大衆の政治同盟に土着する
二 土着化した私の結社は大衆集団化しその矛盾をおしつけられる

第二節 政治結社の分裂

一 大衆政治同盟の内部矛盾に耐ええない結社は反乱の圏外に去る
二 私の同盟への参加は結社の解消ではなくその再生の契機となる
幻の政治結社へ

第三節

一 闘いの戦略的課題を直視して私は集団を指導すべき位置に立つ
二 幹部団は戦略課題をめぐり激論し私の集団は戦闘へと結集する
三 戦略的な課題が指導部を再形成しえたとき私の集団は飛躍する

第四節 政治指導の発想

一 分裂は集団の内部矛盾の外化であり指導はその再内面化である
二 指導とは制度ではない―集団の将来にたいする私の憂慮である

第六章 政治権力

第一節 集団の制度

一 私は集団の心的な統一性に客観的な形を与え集団を制度化する
二 私の生み出す制度は集団の客観的統一性として私に帰ってくる
三 制度化によって私の集団は他の集団にたいする公的な力となる

第二節 階級の発見

一 集団の制度化は政治における客観的なものの宿命を露呈させる
二 私は集団の制度化において私の集団の階級的性格を再発見する
三 私は政治の経験史を階級形成と階級闘争の歴史として総括する
四 客観的なものの宿命に直面して私の闘いは悪戦の模様を呈する

第三節 集団の権力

一 制度化を介した集団の統一によって私の集団は権力を行使する
二 私の権力は集団内面を自ら組織化する能力と権威―自治である

第四節 コミュニオンと二重権力

第七章 党

- 一 コミューンで私は反乱世界を政治的に再建し自治を開花させる
- 二 私はコミューンの自治を新しい国家のモデルとまでおもしろいこむ
- 三 コミューンの自治は対岸に最後の敵として国家権力を発見する

第一節 プロローグ——遠方から

- 一 政治的な遍歴の途上にある私のところへ遠方から党が帰還する

第二節 戦術の党

- 一 党の戦術的な介入をつうじて私は党に出会い党の呼び声を聞く
- 二 私の政治的経験史の展開が唯一の党ではなく多くの党をまねく
- 三 政治における客観的なものの宿命が戦術としての党に集中する

第三節 固有の党

- 一 党は形成されるのではなく私の反乱の以前にすでに存在する
- 二 党とは私の政治的経験史にたいする「組織された不信」である
- 三 党内闘争——「組織された不信」は党の中心部にもむけられる
- 四 私党——「ここに革命はない」からこそ党は革命へと促される
- 五 ここに革命はないという場所に耐えることが党の意識性である

第四節 党の実現

- 一 党は私たちを指導するのではなく私と対象的实践の関係を結ぶ
- 二 党は戦術的経験の蓄積を戦略として客観化し党の作風をつくる
- 三 私の経験が党を実現しそのつど党は私の経験史へと解消される

第五節 大衆の党

- 一 大衆の党は革命にさいしかえつて固有の党の宿命を露呈させる
- 二 大衆の党は固有の党を否定するが党の宿命までは解消しえない

第六節 エピローグ——国家へ

- 一 党はその実現のはてに党による国家権力奪取の課題に直面する
- 二 国家権力を奪取した党と私はあらためて国家へさしむけられる

終章 回帰——政治と倫理

第一節 倫理的なものの反乱

- 一 政治の技術化のはてかえつて倫理的なものの反乱が経験される

- 二 大衆の登場が倫理的なものを政治化し政治を倫理と混淆させる
- 三 失われた自己をもとめて私は政治へと促され政治を倫理化する

第二節 政治的なものの倫理

- 一 政治的経験の一面性に耐えるところに政治の固有な倫理がある
- 二 徹底的に政治的であることに耐えるところに政治の倫理がある

引用文献について

あとがき

索引